

出題のねらい

㊦は、2011年の小説、小川洋子『人質の朗読会』からの出題です。人質になって殺されてしまった人たちが、実は各自の体験した物語を発表し合う朗読会をしていて、それが事件後に発表される、という設定の連作短編集です。その中から六番目の物語「槍投げの青年」を選びました。朝の通勤電車の混雑の中で、異様に長い迷惑な荷物を申し訳なさそうに運ぶ青年を主人公は見つけ、気になって後をつけると、その長い荷物は槍で、青年はグラウンドで1人きりの練習を始めます。それを主人公が遠くから見つめる場面です。したがって、会話も感情のぶつかり合いもありますが、ただの状況説明ではありません。主人公の視線から、さまざまな思いが読み取れます。主にそこを問う問題です。難易度は高かったようです。

㊧は、池内紀『池内式文学館』からの出題です。ドイツ文学者である著者は、幅広い教養の持ち主で、多彩な文筆活動を展開しています。優れたエッセイもたくさんあり、受験生にも読んでほしい文章が文庫や新書として刊行されています。同書所収の夏目漱石『坊っちゃん』論は、『坊っちゃん』の面白さや何故面白いのかなどを、わかりやすく生き生きとした文体で論じています。論旨を追いながら丁寧に読んでほしいと考え、出題しました。一の文章に比べ、読みやすかったはずですが、一の読解に時間を取られ、時間がなかった受験生も多くいたようです。試験では、一、二の順番に解答する必要はないのです。まず全体を見渡して、解答しやすそうな文章から読みはじめればよいのです。制限時間の使い方を考えられる力も大切です。

㊨

【解答】(50点)

問一	a 邪魔	b 奏	c 悠然	
	d 施	e 潜		(各2点×5)
問二	最初の四歩は力が入っていないかのようで、次の八歩で勢いが両足から上半身へと蓄えられ、最後の七歩で大地からくみ上げられた力が青年を満たす。(8点)			
問三	神 (4点)			
問四	エ (4点)			
問五	歩きながら (4点)			
問六	構える、助～り返した。(4点)			
問七	死者を悼む(こと)。(4点)			
問八	一体 (4点)			
問九	銀色の直線 (4点)			
問十	ウ (4点)			

【解説】

問一 基本的な漢字の書き取り。正答率の低かったのが「施す」「悠然」。他は6～8割の正答率でした。

問二 6割弱の正答率。字数の多い問題ですから配点が高い、と考えるべきです。今回はこの問題で点差が開きました。あきらめて何も書かない答案が目立ちましたが、むしろ、この問題に力を注ぐべきでしょう。また、完璧に解答できるに越したことはありませんが、不十分でも大きく要点を外していなければ部分点が取れます。悪くても、半分の4点を取れる努力をしましょう。なお、この問題は「力の込められ方の変化」を問うているのが特徴です。つまり、「姿勢の変化」を答えてはいけません。また、文章全体の構成にも気づきましょう。前半で述べた様子を、後半でニュアンスを変えて述べ直すことが目立ちます。この問題の場合は後半に答えがありました。このふたつを意識できれば8点満点を取れるはずです。

問三 比較的よくできていました。「超越的な存在」というのが大きなヒントです。それは「神」でしょう。

問四 今回で最も間違いの多かった問題です。「イ」と答えた人が多かった。たしかに「ありふれた内容」の練習です。しかし、文章をよく読んでください。青年はそれを「淡々と繰り返した」と主人公は見るのですから、「情熱」に「特別なものを感じた」とは言いにくいでしょう。その単調な動作の繰り返しに主人公は特別な思い入れをしているのです。

問五 2割程度の正答率。「歩きながら青年は考えている」の「考えている」と「思索」は同じだ、と気がつけば、本来これは簡単な問題ではないでしょうか。

問六 3割程度の正答率。「傍線⑤のある段落以外から」「五十字以内で」という注意書きを見逃した人が目立ちました。

問七 3割程度の正答率。「槍を投げる」と書いた誤答が目立ちました。傍線⑥のあるこの段落をもう一度読んでみてください。青年のやっていることは、たんに槍を投げるだけのことでしょうか、それとも、それ以上のことを主人公は見て取っているのでしょうか。前者でないことは明らかでしょう。

問八 よくできていました。槍と青年が「一体」となっていることを主人公はこの文章全体を通して表現しよ

うとしているとも言えるでしょう。「一塊」という解答もありましたが、「一体」の方がより適切です。

問九 よくできていました。「隠喩」とは何かを知っていればできるでしょう。「一番最後の例」とあるから、最後から探せばすぐ見つかりますね。

問十 3割程度の正答率。文学史の問題はかなりの確率で出題されます。近代文学の代表的な作家と代表作は、読んでなくてもいいから知っておきましょう。「ウ」だけが島崎藤村です。

㊦

【解答】(50点)

問一	a 同僚	b 舞台	c 占	
	d 婚約者	e 終始		(各2点×5)
問二	読後のしみ			(4点)
問三	表では人を			(4点)
問四	キミに気味と黄身を掛けているから。			(4点)
問五	オ			(4点)
問六	薄っぺらな			(4点)
問七	ニガ味が入			(4点)
問八	イ			(4点)
問九	「坊っちゃん」は小説の主人公で、坊っちゃん は人生経験の浅い若者を示している。			(6点)
問十	(1) 「坊っちゃん」			(2点)
	(2) ア			(4点)

【解説】

問一 基本的な漢字の書き取り。「占める」の正答率がやや低く、「終始」を「終止」と誤るものが目立ちました。

問二 文章の冒頭は、文末と首尾照応している場合が多く、「読み終わると、きっと幸せな気分につつまれている」理由は、文末の「読後のしみじみとした幸せは、～のせいだ」と呼応しています。残念ながら正答率は2割程度しかありませんでした。

問三 「腹に一物ある赤シャツ」は、少し後に「赤シャツもきつといる。表では人をおだてて裏であれこれ画策している」と言い換えられています。「裏腹」などという語もあり、「裏で画策」は「腹に一物」と繋がるでしょう。8割程度の正答率でした。

問四 「いいキミだ」は、「胸がスカッとした」に続くので、漢字を当てれば「いい気味だ」となります。「ゴマすり男」の「イヤなやつ」に「卵の黄身」で「天誅を加えて」「いいキミだ」というのですから、この「キミ」には「気味」と「黄身」の両方が掛けられた表現になっています。正答率3割程度。

問五 「タヌキ」は、昔話や伝説では、人を化かすとされたので、うそをつく人や、したたかで一筋縄ではいかない人を「タヌキ」と評するようになりました。ここは、後に「たたく」という動詞があるので、「陰口をたたく」が正解となります。悪口は「いう」、悪態は「つく」、暴言は「はく」ものです。8割程度の正答率がありました。

公募制推薦入試／国語(後期)

問六 「薄っぺらな～下駄がある」「履き物一つにも～が出ている」と丁寧に読んでいけば、「人間の薄っぺらなところ」と正解に辿り着けるはずですが、正答率2割程度。

問七 「いまどこかで、さぞかし似たようなことが起っている」ことへの「社会批判」が「ニガ味が入り」という比喩となり、「お子様ランチではないのである」という断定に繋がります。正答率7割程度。

問八 「竹を割ったような」とは、さっぱりして、わだかまりがなく、曲がったところがないさまをいいます。「きっぱりした」と誤った人も多くなりましたが、ニュアンスが異なります。正答率3割程度。

問九 坊っちゃんとは、人生経験の浅い若者をいう語ですが、「坊っちゃん」と「」を付けると小説の主人公を表すこととなります。小説に登場する「私」などに対して、私と区別するため「私」と「」を付けることがよくあります。正答率は1割程度しかありませんでした。

問十 (1)「清の墓」の前にいる人だから、当然「坊っちゃん」ということとなります。正答率7割程度。(2)「影をおびた」という修飾語を付けたのは、筆者が「坊っちゃん」を「頭に少し白いものがまじりだした齢」まで「鉄砲ダマのように、まっすぐにしか生きられな」かった人間であり、そんな「坊っちゃん」の唯一の理解者であった清のことを、「心変わりなどしない」「ひそかな恋人」のような存在と認識していることに基づいています。「姓も名もわからない」ことは、最も関係が薄い事柄です。正答率は2割程度しかありませんでした。